

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007-2008

課題番号：19520417

研究課題名（和文）

「談話における指定文に関する総合的研究－関連性理論、認知言語学による考察」

研究課題名（英文）

A Study of Specificational Sentences in Discourse: Relevance-theoretic and Cognitive Approach

研究代表者：

加藤 雅啓 (Kato Masahiro)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：00136623

研究成果の概要：

it分裂文の焦点に生起する副詞について、「制限下接詞onlyによって焦点化することができる付加詞、下接詞は、モダリティ領域から命題領域への認知転換が可能である」ことを実証的に検証し、分裂文の総記的含意と認知転換について新たな提案を行った。

日本語のガ分裂文の研究では、報道文から収集した後項焦点のガ分裂文を関連性理論の観点から分析し、後項焦点文のB項は、先行文脈の話題を断ち切り、新しい話題を導入する機能を持つことを新たに提案した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：英語学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：

- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| (1) 指定文 | (2) 分裂文 | (3) 疑似分裂文 |
| (4) コピュラ文 | (5) 関連性理論 | (6) ガ分裂文 |
| (7) 談話 | (8) 認知語用論 | |

1. 研究開始当初の背景

指定文とは変項(variable)と値(value)との二項関係($X=Y$)を表す文であり、変項はいわば未知数に、値はこの変項を指定する答えに相当する。具体的には、分裂文、及び指定

的用法の疑似分裂文とコピュラ文を挙げることができる。これまで文法の問題として扱われてきた項目の中には、場面や文脈、及びこれに基づく推論等の要因を考慮しない限り一般的な説明ができない現象が含まれている。とくに it-分裂文や疑似分裂文などの

有標語順を生み出す指定文は、話し手・聞き手の背景知識に基づく「会話の含意」や推論過程が複雑に関与するため、その語用論的機能と解釈に関して語用論や認知文法の枠組みにおいても本格的な研究がなされておらず、依然として一致した見解が得られないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究では、関連性理論、及び認知言語学の成果を取り入れた認知語用論の観点から、新たに談話における指定文を分析、考察する。

具体的には、英語の *it* 分裂文、及び日本語の *ガ* 分裂文を取り上げ、それぞれの構文の (1) 定義と分類、(2) 談話における認知的、語用論的機能と特性、(3) 認知効果と処理労力の関係、(4) 談話における認知的際立ちとその認知プロセス、(5) 分裂文の焦点に生じる副詞の分布、(6) 認知領域の転換、(7) 前項焦点文、後項焦点分裂文の機能、(8) 後項焦点文の話題転換機能等々について個別に明らかにする。さらに個々の成果を有機的に結びつけることにより、従来の枠組みでは得られなかった新しい知見を得て、これらの指定文に共通する談話機能の特性とその存在意義を明らかにする。結果として談話における指定文の認知プロセスと推論メカニズムの全容を総合的にとらえ、これを明示的に解明しようとするものである。

3. 研究の方法

英語の分裂文を取り上げ、談話における認知的、語用論的機能と特性について考察した。とくに、分裂文の焦点に生起する要素に着目し、副詞相当語句(*adverbial*)のうち付加詞と下接詞をとりあげ、どのような条件の下に *it* 分裂文の焦点として生起できるのか、意味論、とくに中右(1994)の階層意味論の立場、及び認知語用論の立場から考察を進めた。

具体的には、

- (1) 「階層意味論とモダリティ表現」
- (2) 「*It* 分裂文とモダリティ表現」
- (3) 「時間副詞と *it* 分裂文」
- (4) 「頻度副詞と *it* 分裂文」
- (5) 「強意副詞と *it* 分裂文」

- (7) 「時の副詞節と *it* 分裂文」
- (8) 「理由の *because* と *it* 分裂文」
- (9) 「頻度付加詞と *it* 分裂文」
- (10) 「様態の付加詞と *it* 分裂文」
- (11) 「手段・道具・動作主の付加詞と *it* 分裂文」
- (12) 「下接詞の統語的特徴」
- (13) 「下接詞から付加詞への転換」
- (14) 「領域の認知転換」
- (15) 「命題領域からモダリティ領域への認知転換」
- (16) 「モダリティ領域から命題領域への認知転換」
- (17) 「総記的含意と認知転換」
- (18) 「*it* 分裂文の総記的含意」
- (19) 「付加詞、下接詞の認知転換と総記的含意」

等の観点から、*it* 分裂文の焦点に生起する副詞相当語句の特性を具体的に論じた。

さらに日本語の *ガ* 分裂文を取り上げ、談話における認知的、語用論的機能と特性について関連性理論、認知語用論の枠組みによって考察した。

具体的には、

- (1) 「分裂文の定義」
- (2) 「二種類の *ガ* 分裂文」
- (3) 「*ガ* 分裂文の焦点」
- (4) 「天野(1995a, b)の問題点」
- (5) 「*ガ* 分裂文を巡る砂川(2005)の議論」
- (6) 「*ガ* 分裂文とプロソディックな強勢」
- (7) 「*ガ* 分裂文と「だけ」による限定」
- (8) 「*ガ* 分裂文と否定」
- (9) 「*ガ* 分裂文の談話機能」
- (10) 「前項焦点の *ガ* 分裂文の談話機能」
- (11) 「後項焦点の *ガ* 分裂文の談話機能」

等の観点から日本語の *ガ* 分裂文の認知的・語用論的機能を認知語用論の枠組みで分析した。

4. 研究成果

本研究は、*it* 分裂文の焦点に生じる副詞相当語句をめぐって、これまで明らかにされてこなかった命題領域とモダリティ領域の認知転換について、双方向に認知転換が可能であること、及びその意味論的・認知論的メカ

リズムを実証的に検証した。

具体的には、中右(1994)のモダリティ理論を踏まえて、it 分裂文の焦点に生じる副詞相当語句を分析し、その結果を次の表にまとめた。

詞(節)成分	命題内容成分	モダリティ成分
時間副詞	yesterday	<i>usually</i>
概括副詞		<i>normally, generally</i>
頻度副詞	always, often, occasionally	<i>always, often</i>
強意副詞(焦点化副詞)		<i>only, particularly, also, purely, chiefly</i>
時の副詞節	when, since, until, after	
理由の副詞節	because(客観的因果関係)	<i>because(主観的推論関係), as, since</i>
複合接続詞	<i>so that(目的節)</i>	<i>so that(結果節)</i>

このことから it 分裂文の焦点に生じる副詞相当語句には、命題内容成分に分類されるものとモダリティ成分に分類されるものがあることが分かる。

本研究では、it 分裂文の焦点に生じる頻度付加詞、様態の付加詞、手段・道具・動作主の付加詞を詳細に分析し、命題領域からモダリティ領域への認知転換に関わる中右(1994)の議論を検討した後、制限下接詞 only によって焦点化される場合を考察した。その結果、次のことが明らかになった。

(1) 制限下接詞によって焦点化することができる付加詞、あるいは下接詞は、当該の発話においてその真偽を問うことができる、すなわち命題内容成分として認知される。

さらに、(1)の論理的帰結として、次のように述べることを明らかにした。

(2) 制限下接詞 only によって焦点化する

ことができる付加詞、あるいは下接詞は、発話内でモダリティ成分(モダリティ領域)から命題内容成分(命題領域)への認知転換が可能である。

この成果は、中右(1994)で展開されている認知意味論の知見を it 分裂文の焦点に生じる副詞相当語句の分析に援用したものであり、認知領域の転換は、命題領域からモダリティ領域ばかりではなく、モダリティ領域から命題領域へも生じることを明示的に明らかにしたものである。この意味で本研究は、国内外の認知意味論研究に新たな一石を投じるものとして位置付けることができる。

さらに、本研究では、日本語報道文から収集した後項焦点のガ分裂文を関連性理論の観点から分析し、(i)後項焦点文のA項には、代用表現(語彙的繰り返しを含む)の出現率が比較的高いこと、(ii)後項焦点文のA項は、先行文脈の話題と何らかの意味的關係を持つ傾向がきわめて高いことを明らかにし、(iii)後項焦点文のB項は、先行文脈の話題を断ち切り、新しい話題を導入する機能を持つこと(話題転換機能(topic shift))を新たに提案した。

具体的には、ガ分裂文については砂川(2005)の定義を採用した上で、天野(1995)に従い、次の2種類のガ分裂文が存在することを確認した。

(3) 二種類のガ分裂文

前項焦点文:「Bであるものは何かというと、それはAだ」という意味

後項焦点文:「Aであるものは何かというと、それはBだ」という意味

これに対して砂川(2005)は、(i)プロソディックな強勢を置けるか、(ii)「だけ」による限定ができるか、(iii)否定文にできるか、という3つの観点から、ガ分裂文を分析し、天野(1995b)の後項焦点文を認めず、ガ分裂文は前項焦点文と全体焦点文の2種類に分類できると主張している。本研究では、このような主張に対して、ガ分裂文とプロソディックな強勢、「だけ」による限定、及び否定分裂文を詳細に分析した結果、砂川(2005)の「～が～だ」文は後項焦点文ではないとする議論は妥当なものではないことが明らかになった。そのうえで、報道文・週刊誌から収集

した 33 例の後項焦点文を分析し、次の 2 つの特徴を明らかにした。

- (4) a. 後項焦点文の A 項には、代用表現(語彙的繰り返しを含む)の出現率が比較的高い。
b. 後項焦点文の A 項は、先行文脈の話題と何らかの意味的關係を持つ傾向がきわめて高い。

さらに、後項焦点文の機能を詳細に検討した結果、後項焦点文の B 項は、次のような談話機能を担っていることを提案した。

- (5) 後項焦点文の B 項は、先行文脈の話題を断ち切り、新しい話題を導入する機能を持つ。(話題転換機能(topic shift))

この成果は、日本語のガ分裂文の研究に関して新たな方向性を示すものとして位置付けることができ、従来の日本語分裂文研究に対して認知語用論からのアプローチの有効性を示すものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

①加藤雅啓「ガ分裂文の談話機能」上越教育大学研究紀要 第 28 巻 119-130.
平成 21 年(2009) 2 月 (査読なし)

②加藤雅啓「It 分裂文の焦点に生じる付加と下接詞」上越教育大学研究紀要 第 2 巻 163-172.
平成 20 年(2008) 2 月 (査読なし)

③加藤雅啓「It 分裂文の焦点とモダリティ表現*—命題領域とモダリティ領域の認知転換と総記的含意—」 *International Journal of Pragmatics*, vol. 17, 1-19. 日本ブラグマティクス学会
平成 19 年(2007) 12 月 (査読あり)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 雅啓

上越教育大学・学院学校教育研究科・教授

研究者番号：00136623